



直会旅行 方 広 寺 (55. 2. 7)



マーシャル方面遺族会
 (旧クエゼリン方面戦没者遺族会)
 郵便番号 154
 世田谷区野沢 3-11-3
 電話 東京 (424) 4300
 振替口座東京 0-93487 番
 編集兼発行人 佐藤宗不

慰霊祭・総会に参加して

横手市 小室 舜 司 郎

七夕様と同じ一年一度の楽しい面会、今年も慰霊祭に参列、直会旅行にも参加させて頂きました。

毎年のごとく、神前に厳肅な祝詞奏上のひととき、物音一つなく、ご参列の皆さんそれぞれに亡き御主人、父、子、兄方の在りし日を想い浮かべられたのではないのでしょうか。私も亡弟の子供の頃からの想い出があれこれと走馬燈のように頭の中をめぐり何とも表現できない一時でした。

終つて総会に移り、会長様より事業報告を承り、昨年マーシャルよりのお客様が会長様を頼りにお出での由、平素クエゼリンの碑の管理や、先年来数次の現地墓参の折の御恩返しと、その接待に大変御苦労お掛けしたとの事、この事は環礁でも拝見致しましたが唯々感謝申上げる他はございません。

そして又昨年末にマーシャル地方が高波に襲われ、大被害を蒙られたとの事、標高わずか一米、山も谷も無い平地で、中央に立てば兩岸が見えるような島と聞くと、その被害も察せられ誠にお気の毒な事と思います。

決算、事業計画、予算と満場異議なく原案可決。会員側より幾許かの役員報酬の動議も出ましたが、規約に無いからと取上げられず、役員の方々の常々の御労苦感謝致すのみでございます。

旅行バスの中では岡野幹事さんよりマーシャル地方高波被害に対し見舞の募金案が出されて満場の賛同で袋が廻され、そこに集まったお金を会から被害地に贈って下さる事になりました。

初めて私が慰霊祭に参列したのは去る四十三年二月で、あれより十余年、自分を含めて皆当時から見ると随分年をとられましたし、当時来られた方々で最近見えない方もあるのは淋しく感じられますが反面お若い方々の見えるのは何より嬉しい事で、八十余才の老祖父さんに付添うて来られ手を引いて歩く孫娘さんの美しい姿、子を思う母の心情を汲み亡母の

目次

慰霊祭・総会に参加して
 横手市 小室舜司郎 1
 第16号輸送艦を想う
 浮田 信家 3
 ルオットとマロエラップと(三)
 二五二空の戦闘 4
 京 都 平林 和夫 4
 故石橋和彦との別れ
 小松 康宏 5
 とりもつ縁
 広島県 大上八重子 7
 大阪市 松宮 花子 7
 マジユロ起点の航空路ひらく 7
 マーシャル諸島の高潮水害に
 お見舞金をおくる 8
 現地の便り
 山村 要 9
 大里 清 9
 徳原 徳子 10
 中田 勇 10
 寄付者芳名 10

御遺骨を兄戦死の地に墓参の際埋めたと云う弟さん。霊はどんなに喜んだ事でしょう。霊がもし話せるなら、態度に現わされるならその感激は如何ばかりか計り知れませんか。このような若い方を見るにつけ、会の前途に益々明るさを感じ誠に頼母しく感じました。

直会の懇親会では素人芸達者に依るかくし芸やら、ホテル女将さん他の民謡サービス、これに会員の飛入りも加わり、上手な者には抽籤で表彰状が贈られるなど笑いと語り合いに時の経つのも忘れる程でした。

宴が終つて今度は高田様より現地墓参の美しい数々のスライドを見せて頂き、中には戦いの遺品なども写され、苦戦の跡が偲ばれました。高田様の戦記は前に環礎で読ませて頂きましたがさぞ御苦労なされた事でしょう。

旅行も好天に恵まれ、竜潭寺の美しい庭園を拝観、方広寺では広大な境内の参道脇に並ぶ五百羅漢のお顔、姿にそれぞれ違いがあり中に大平首相そっくりの顔があつて思わず笑い合いました。

下山して山の家では成吉思汗料理を美味しく楽しんで頂きました。

そして今年も、途中駅でお別れの方々、東京駅で皆さんとお別れする時は互にまた来年もお逢う者と挨拶を交し余りにも短かい二日間と、別れが惜しまれるのでした。

第16期決算報告書 (自54. 1. 1 至54.12.31)

マーシャル方面遺族会

一般会計第17期予算

(自55. 1. 1 至55.12.31)

1. 一般会計収支計算書

<収入の部>

科 目	金 額
会 費 (過年度分)	294,500
会 費 (当年度分)	1,397,200
寄 附 金 等	1,958,202
受 取 利 息	26,114
雑 収 入	75,460
合 計	3,751,476

<支出の部>

科 目	金 額
慰 霊 費	77,300
運 営 費	1,668,520
刊 行 費	449,970
印 刷 費	25,095
通 信 費	132,520
事務所借用費	292,789
振替払込料	38,940
事務用品費	52,460
会 議 費	130,440
接 遇 費	135,670
雑 費	21,600
退職金勘定繰入	100,000
小 計	3,125,304
当期剰余金	626,172
合 計	3,751,476

2. 一般会計財産目録

資 産 の 部		負 債 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
現 金	43,240	前受会費	801,500
普通預金	885,710	預 り 金	594,200
定額貯金	2,200,000	小 計	1,395,700
振替貯金	24,134	前期繰越金	1,131,212
		当期剰余金	626,172
		小 計	1,757,384
合 計	3,153,084	合 計	3,153,084

<収入の部>

科 目	金 額
前 期 繰 越 金	1,757,384
会 費	1,300,000
寄 附 金	1,500,000
受 取 利 息	50,000
雑 収 入	50,000
計	4,657,384

<支出の部>

科 目	金 額
慰 霊 費	120,000
運 営 費	1,800,000
刊 行 費	700,000
印 刷 費	50,000
通 信 費	180,000
事務所借用費	350,000
振替払込料	50,000
事務用品費	70,000
会 議 費	150,000
雑 費	40,000
予 備 費	100,000
退職金勘定繰入	100,000
次 期 繰 越 金	947,384
合 計	4,657,384

特別会計収支計算書

1. 収入の部	
前期繰越	1,500,000
2. 支出の部	0
3. 次期繰越	1,500,000
<内訳>	
定 額 貯 金	1,500,000

退職金勘定計算書

1. 収入の部	
前期繰越	300,000
一般会計より繰入	100,000
計	400,000
2. 支出の部	0
3. 次期繰越	400,000
<内訳>	
定 額 貯 金	400,000

第 16 号 輸送艦 を 想 う

第一話

今年2月「第16号輸送艦」と云う戦友会の会長さんから「5月17日に戦死者の慰霊祭を行うので是非参列されたい」という丁寧な案内があった。この艦名を見て一瞬戸惑ったが、趣意書を見て記憶がよみがえった。

今から32年前、その頃私は横須賀地方復員残務処理部復員業務課長という立場にあり、連合軍の監視下で復員業務にあたっていた。遺骨収集もその一つであり、昭和23年のことであった。

この年6月東京都世話課から、伊豆七島中新島という島に前記第16号輸送艦が戦争中仮埋葬したのが今なおそのままとなっているとの報告であった。

早速新島の本村に仮埋葬に至った経緯や現状を問い合わせたが、当時は終戦後の混乱時期であり、通信事情、交通事情悪く10月やっと私は二名の事務官とともに新島に行くことができた。

東京月島棧橋を10月18日発、大島を経て新島の海岸に上ったのが20日払暁、新島村役場、消防団、青年団が一日仕事を休んで、遺体の発掘作業や茶毘の作業を奉仕して下さった。当時の消防団長植松長左エ門様が総指揮官でこの仕事を進めて下さった。21日であった。遺骨を捧持して22日に新島発、無事横須賀に帰庁、安置した。

11月御遺骨に、ここに至った経緯を詳記した報告を添えて郷里の御遺族のもとに送り届けた。

第二話

私は御遺骨はお届けしたが、戦友の方にも御遺族にもお会いする機会がなかったので艦のことも戦争のことも知らないで年月が立ったが、今回ご案内をいただき輝かしい御勲功や御遺族の御健勝のご様子に接し悦んだ次第である。

この艦は大東亜戦争の戦勢ようやく我に不利となり、連合軍の本土に接近する様相濃くなった昭和19年沖繩、硫黄島等への我兵力、物資の輸送を強行するのを主目的とする「輸送艦」であって排水量は一、八〇〇トンの小艦ではあるが、速力は22ノット、積載量の大きな「輸送艦」であった。

19年末横浜造船所で竣工し、20年1月、横須賀軍港にうつされ、1月中旬から小笠原諸島を根拠に活躍した。そして2月16日小笠原を出て横須賀に向う航海中米艦戦機が発見され20機近くの集中攻撃をうけた。一隻に20機、応戦にいとまなく、善戦これ努めたが、味方機の来援もなく文字通り孤軍奮闘の時間が過ぎた。

島の人達ははじめは南の方に砲声を聞き、一部の人は近くで海戦が行われ

ていることを感じた。時のうつるにつれ砲声は式根島の方に移り、やがて地内島の方向に飛行機と軍艦の戦闘を認めた。海岸に集った村民は、一隻の敵艦を多数の友軍が攻撃しているとはかき思い、いつ沈むか胸のすく思いで観戦していた。その内地島の北方に近くにつれ飛行機はグラマン戦闘機であることがわかり、従って軍艦は味方であることがわかった。かくては海岸に居ることは危険であるが、今度は艦が心配になって来た。それにしても味方飛行機の姿なく艦を見るもの歯ぎしりをかみ、じだんだ踏んで天祐をのみ祈ったとか。

艦はこの戦況下、機銃掃射をさけるため慌々変針を行い、チグザク運動を反覆して、備砲での応戦を続けたが、内地島に来たときは弾丸はすでに打ちつくし、やっとう砲をもつて、敵機の攻撃を避けるため威嚇射撃でこれに応じた。やがて夕刻近く、敵機はひきあげあたりの静まった頃、軍艦より戦死者重傷者を同島陸軍野戦病院に送った。

新島は伊豆七島中最北の大島から南下すると次が利島でその次が新島となる。南北が10キロ、東西が4キロで主島の外に小さい島が四つ五つという。今でこそ東京との間に毎日一回の定期船が通っているが当時は月に7回貨物船便があるだけという、マーンシャル・ギルバートを思いう僻村であった。

第三話

当時植松さんの仕事場は、村からこの墓地を通り越してさらに先にある坑灰石の石切山であった。20年4月末いつもの通り仕事を了へ、日暮れて一人帰途についた。かねがね戦死者の慰霊に不足はなきや、案じて居られたらしくその日も墓参をしようと考えながら墓地下の道にさしかかると、不意に上から賑やかな「ラッパ」の音や、軍歌が聞えて来た。不思議な事もあるものだとなを見ると海軍の兵隊さんが十三、四人並んで敬礼をしていた。気味悪くなり黙禱して急ぎ足で帰途についた。ものの2丁も走るように歩いて、夜警詰所に使っていた小屋まで来て、ふり返ったら、この兵隊さん達はいつて来たらしく整列して植松さんに敬礼していた。あまりの不思議に翌朝村長に報告に及んだところ、役場でも問題となり、英霊が一日も早く肉親の住む郷里に帰りたくて、頼みに来られたと察し、島にただ一つの長楽寺の住職に頼み、しばらく待つよう懇ろにお経をあげた話は今なお残っていた。

註・クエゼリンでも建碑前は厩ヶ海岸にラッパや軍歌が聞えたことあり。

5月16日の夜東京竹芝棧橋発にはじまり25名の戦友、遺族が慰霊の誠を捧げたことは参加した私も嬉しかった。17日は西伊豆弓ヶ浜の民宿に一泊して昭和20年2月16日を偲んだ。来年もまたその年の慰霊祭を行うことを約し解散となった。(浮田信家)

ルオットとマロエラップと (二)

—二五二空の戦闘を中心として—

平 林 和 夫

二月五日、搭乗員と整備科通信科について、救出一式陸攻二機が、夜間急拠極秘中に飛来した。副長舟木少佐(のち二五二空司令、戦死、大佐)搭乗員十七名その他をのせて直ちに発進した。これが私共が見た味方機の最後であった。マロエラップ・ウオッセ・エニウエトックから計一二〇名が脱出に成功した。

それ以来終戦まで、丸二か年、本土からは飛行機も糧食も、兵員も郵便も、全く杜絶されたまま、私共は苦悩の糧食戦に入るのであった。

クエゼリン・ルオットは二月六日玉砕し、ついでブラウン(エニウエトック)が玉砕し、やがてサイパン・テニヤン・硫黄島・沖繩——戦局は私共の島マロエラップをして、敵からも味方からさえも完全に放棄された。私共はそれから満二年、敵兵でもないゲリラでもない、第三の敵々飢えくと、戦わねばならなくなったのである。

わが二五二空は、無事脱出成功の舟木中佐の下、内地で再建され、私共はすべてその島の所在警備隊に転動となり、同方面には、二五二空隊員は一名もいなくなった。私も六十三警備隊分隊長となったのであるが、分隊と部下

はそのままであったので、実質の転動はなくて二五二空のままでかわりなかった。(私にとつて、結果的には、海軍とは即二五二空、戦地とは即マーシャルということになるのである)

(四) 苦悩の糧食戦

はじめ私共は、敵の来襲の間隙をぬって、間に合せの仮烹炊所でせつせと飯を炊き、せつせと戦闘配食をして、主計科の本职工作をつくそうとした。しかし戦局が長期化し、糧食の補給が困難視されて来ると、先ず糧食の節減を図らねばならなかった。先ず一割減—やがて二割減にした。警備隊主計長平田主計大尉はこれらの連絡をよくして、先任者としての指導をしてくれた。

次に離島倉庫に分散格納していた糧食を、夜間秘かに本島にとり入れに行った。作業員に出た各科の兵隊が、実によく気合いをかけて働いてくれた。

それから現地物資とり入れにかかった。南瓜・甘藷をふやすことも心がけ、食べやすい野草を(南洋ほうれん草とよんでふやした)。塩づくりも始めた。

戦局次第に後退するにつれ、食糧問題は極めて重大となってきた。この為やがて糧食増産委員制が設けられ、各

隊・各分隊の代表が委員を命ぜられ司令直轄として発足を見たのである。即ち食糧増産について、この委員会が中央的機能を果たすことになったのである。紙数を消しすぎたので、以下時期の前後を越えて、要点のみをまとめてあげてゆくことにする。

一つは糧食納付点数制の実施であった。これは戦闘配置の上で、食糧増産にかかりきりでできない兵員があること、爆撃の被害が集中し片よること、又栽培する場所が主に仮設の居住小屋(兵隊はこれを「セブリ」とよんだ)の近くであったが、地味・地勢に相違があつて、結果的に不公平が出来る恐れがあつた。それで「ほうれん草」などを沢山作つた者に、これを一定の点数で納付させ、代りにコブラや塩を一定の点数で特配をする仕組であつた。ただ一定の点数というのは、情況逼迫につれて、シーソーのように次第に価値が上り一種のインフレ現象を見せていた。

二つは、魚撈班の編成であつた。正式に魚撈班が作られ、急造の網を引いたり、ハッパを利用して魚をとることになった。詳しいことにふれる余裕がないが、ハッパは運がよいと沢山の魚がとれることがあつた。

三つは農学校卒業又は農村出身者で特に農園係を組織的に特別配置して農園指導に当り、甘藷の苗作り、植込み

丹念に指導実施したことである。

そして最大のことは、離島食糧開発隊の編成であつた。始めこの環礁の他の離島に、相当数の島民もいたが、その離島に十九年八月開発隊が派遣されることになった。十一ヶ島に計二五〇名位が出され、やし(コブラ)・パンの実・木の实・パイヤの若い幹・塩・魚(干物又はくん製)・燃料用やし(干物又はくん製)・夜、大八でこれを探りに行った。この蒐集班が派遣される日が、島の「命の日」であつた。

年を越して、二十年になり、戦況はさらに後退悪化した。「不沈空母」とうたわれたこの基地は、大洋中のただ一粒の「飢えたる孤島」に化していた。最早、戦いの相手は、全く第三の敵、飢えであつた。兵は敵に対する対抗意識とは異質に、未経験の餓死ということへの本能的恐怖があつた。初めはえずいてのどを越さなかつた野草なども無理をして食つた。ねずみもおろぎも何でも食べた。少々の毒にやられても、どんな魚でも、とれた魚は食わざるを得なかつた。

私共は農園作りに必死となつた。敵は何回もピラをまいて、私共を「自活せる捕虜」と呼んで降伏勧告をしてきた。それが信じられないと知るや、この島を「爆撃練習地」として使用を宣言し且つ実行した。爆撃の後は灰砂をかぶつた甘藷の葉を、一枚ずつ洗わねばならなかつた。放っておくと枯れ

るからである。兵隊は、おいおいと声をあげ口惜し泣きをしながら甘藷の葉をていねいに洗った。

最悪の状態が来た。私共の身体は10貫台となり、体の肉の丸味はなくなつて、胸は一枚の薄い板のようになって。カロリーは軍医の計算で、規定の19%の、推定五九二カロリーとなつた。秘かに農園荒しがおこり、立番が必要になつて来た。魚とりも一人で行くのは危険になつて来た。離島に逃げようとする者もあり、手製の筏や舟で外海に逃げる企てをする者(主として施設部)も出て来た。やがて「栄養戦死」という名が生まれて来た。

私共はいらいらした。この島から、とにかく出たいと思つた。撃沈されよがままよ、とにかくこの島から出撃したいと思つた。このまま自滅したくないと思つた。敵が上陸して来て、一時間でも三十分でも、闊つた方がよいと思つた。私共は敵の上陸を避けたい気持とそれを求める気持の相反する対立にいらいらした。

戦死の数字から実情を眺めてみた。当初この島に三三二九名がいた。このうち二〇五九名が戦死したが、そのうち二五一名がいわゆる栄養戦死であつて、直接的戦死は極めて少しいた。これが島の苦惱ぶりを如実に物語つていた。

私はある若い兵隊がのこした言葉が忘れられない。「主計長が故里に帰ら

れたら、私の母に伝えてほしい。自分の墓に、あつあつの飯を、山盛に供えてくれ」と。

(六) 終戦以後

このように厳しい状況におかれた孤島の基地も、しかし二十年五月頃から、栄養戦死は次第に減りはじめて来た。それは雨季を得て甘藷苗がよくつくようになったこと、敵の爆撃が次第に遠のき哨戒のみになつて来たことと、体が細くはあつたが、現地物資に体質が馴れて、消化吸収がよくなつて来たことであつた。そしてほぼ自給自活の見通しがつきかけて来たのであつた。

やがて戦局はいよいよ内地に及び、原爆の洗礼を経てついに終戦の詔とはなつた。

わがマロエラップ島は、戦いに敗れた口惜しさと、戦いが終つた安どめいた気分が全島をおおつて対流した。

第四艦隊長官の指示を経て、「司令は降伏の調印をされ、私共は軍刀と小銃等を整然と自ら解除提供した。私共は墓地を整理し遺骨を全員持帰るよう用意をし、墓碑をたて慰霊祭を行つて、十一月特別輸送艦鳳翔に乗つた。

私共のせめてもの慰めは、現地に墓碑を建て、遺骨を持帰つたことと、それから捕虜(私がいつてからでも三回以上二十五名以上の捕虜が得られていた)虐殺、島民虐殺の戦犯を一人も出すことがなかつたことであつた。このことは六十三警備隊鎌田司令、平田主計

長をはじめとする指揮者のよき判断と指示によるものであつた。主計科は戦友会「寛賜会」を、現地で発会した。引揚に當つて二年ぶりに見るなつかしい味方の軍艦に乗り、はじめての熱い米の飯の、湯気がばーっと頬にかかつたとき、誰一人涙しない者はなかつた。

◇◇◇

故石橋和彦君との別れ

小松 康 宏(6班)

昭和十八年九月だつたと思う。戦艦榛名乗組から佐世保工廠会計部に転じていた私は、第六根拠地隊司令部附、砲艦香取丸乗組を命ぜられた。聞けば、香取丸は六根の旗艦としてクエゼリン環礁を泊地としている由。

クエゼリンは、はるかマーシャル群島の中核に位置し、ウェーキ島の南三〇〇カイリにあり、中部太平洋の米國にもっとも近い第一線であるから、私も覚悟を決めて身辺もきれいに整理し、母にも会つて別れを告げ、横浜沖から川西大艇に乗つた。途中サイパンに一泊、トラックに二泊、トラックでさらにクエゼリン行きの大艇に乗つて飛び、ようやく着任した。

六根司令部に出頭すると、参謀の音羽侯爵(旧朝香宮正彦王殿下、後玉碎さる)が出て来られて「よく無事に着

現在私は丹後の田舎町で教員を勤めている。幸いに生きて戻れた復員の私、あだおろそかな生き方は出来ぬと思うし、平和ということをも十分子供らに教えたと思つて、教員の仕事に入った。そして三十年が終ろうとしている。

(元二五二空主計長、海軍主計大尉 現京都府久美浜小学校長、54・2・20記)

いたな。(当日トラックから二機飛んだが、他の一機は途中で墜落した由)。ただし残念ながら、貴官が乗ることになつては香取丸は、今般軍籍を解かれ、ラバウル方面の特別輸送に従事することとなつた。貴官は横領附の辞令が出ているから、乗つて来た川西大艇が明朝トラックへ引き返すので乗つて帰れ。まごまごしていると帰れなくなるぞ」と懇切に指示された。

せっかく太平洋上をはるばる飛んで来たのにとガツカリしたが致し方もない次第だ。その夜は司令部の宿舎に泊めてもらうこととし、寝るまでの数時間、せめて同期の連中の顔だけでも見て帰りたいと思つた。まず六根司令部で土岐良男(16)と懇談、戦局や内地の状況などいろいろと話した。彼は元気だつたものの、仕事はひまで平凡な

毎日だ。しかし、「最近敵機が出没するようになったので、いつまで平穏が続くかわからん。貴様は内地に帰れるんで良いな」といったが、後にして思えば、何とはなしに沈みがちだったように覚えてい

次に、クエゼリン警備隊の石橋和彦(2)に会いに行つた。彼は同じ一部で親しかつたし、どうしても会つておきたかつた。何しろ狭い島だから、司令部から警備隊まで歩いて一〇分とかからない。砂道はすこぶる暑いけれども清澄な潮風が快い。

このクエゼリン環礁は、逆「く」の字型をした環礁で、七〇の小島が連なっている。一番大きい島が北端のルオット島と南端のクエゼリン島で、両島に飛行場がある。大きいとはいってもクエゼリン島は、幅が八〇〇メートル、縦が四キロの航空母艦を数倍にした程度の小さな島で、しかも全くフラットな砂だけの島だから、もし米軍の反攻があつたら、たちまち砲爆撃で吹き飛んでしまひそうな気がした。

石橋は当時、第六一警備隊の庶務主任と、軍需支所の部員を兼ねていたが、明るい性格の故もあつて、会つてみると大変元気で張り切っていた。私の来訪をすこぶる喜んで、「懐かしいなあ、こんな遠い所だから、近在の間以外にはだれも来ない。遠来の珍客を歓待したいんだが、ご承知の通り、近ごろは補給もとだえがちで、潜水艦

が物資を運んでくれるくらいで何もないが、幸い今月分の酒保をとつてあつたから、これで二人で乾杯だ」という。聞けば一カ月分として一人あてビール二本と大福六個の配給だのと。そこで互いに大福を一個ずつとビール一本を分けて飲みながら、手を握りあつてお互いの武運を祈り、死ぬ時はいさぎよくと替いあつた。

彼も覚悟はでき上がつていたようで、淡々たる心境で、戦局を語り、三時間あまりの時間があつという間に過ぎてしまつた。そして帰る途中まで送つて来た彼が、「この島は椰子だけで本当に何にもない殺風景な所だ。われわれが植えたバナナが育つのが楽しみだ。人間も兵隊ばかりの島だが、それでも土人もいて女が数名いるのかな。先日久しぶりにその土人の女にすれちがつたが、久しく見ないと土人の女でも美人に見えるね」と阿々大笑したのを思い出す。

残りの同期の諸君にも会いたかつたが、あいに別の島にいたり、出掛けていなくなつたりであつたが、皆元気で時々会食をしたりテニスをやつたりしている。貴君がくれぐれもよろしくいつていたと伝えておく」とのことだつた。

当時この方面にいた九期生は、真面目人間の川生敏武(13)が九五二空水上偵察隊)にいたが、基地は北二カイリの隣島のエビジエ島にあるという。古賀正太(22)は、第四工作部附でク

エゼリン支部にいたが、エビジエ島のさらに北隣のグケ島にあり、野瀬一(6・七五二空)は環礁北端のルオット島にあり、クエゼリン島にいたのは、石橋、土岐両君と三ツ木秀夫(19・潜水艦基地隊)、助川直正(1・第四経理部)谷口博一(5・第四施設部)の五名だつた。三ツ木のところは離れているし翌朝の出発も早いので、他の諸君と会ひのあきらめて司令部に戻つた。

同期の八名の諸君は、数カ月後の米軍のマインシャル進攻で、守備隊とともに玉砕された。マインシャル方面は十九年一月三十日、早朝より米機動艦隊の艦上機の攻撃を受け、続いて艦砲射撃と熾烈な砲爆撃の反撃後、米海兵師団が上陸作戦を行い、守備隊海軍の勇戦敢闘も空しく、クエゼリン島は二月四日ごろ、エビジエ島は二月五日に、グケ島は二月六日に陥落し、全守備兵は玉砕をとげた。

多少の予感があつたにせよ、玉砕が近々数カ月後に迫るとも知らず、私は翌朝クエゼリン環礁を飛び立つた。帰路は機銃手の代わりに銃座に乗せられ、もしボーイングと遭遇したら撃ちまくつてくれといわれたが、幸い無事にトラクに着き、また飛行艇を乗り換えて横須賀に戻つた。

数日後、駆逐艦汐風主計長を拝命、横須賀で乗艦、その間に石橋に依頼された主計中尉の襟章を他の諸兄のもの含め十組くらい送つた。その直後、マキ

ン、タラワの大空襲があつたので、果たして無事着いたかなと危ぶんでいたら、クエゼリン玉砕が伝えられて数日後、ひょっこり石橋よりの手紙が配達された。取るも遅しと封を切ると、文面では「襟章を早速送つてくれてありがとう。新しいのをつけてみたところ、従来の自製にくらべ断然良い。気分爽快独りで悦にいつている云々」とあつた。

この絶筆を私は固く胸に抱きしめ、クエゼリンの諸兄があつた孤島で、凄絶な米軍の砲爆撃に耐えて、立派に職務を果たして祖国のために殉じてくれたことを思い、何ともいえぬ気持ちで冥福を祈り続けたことだつた。

石橋の絶筆は、当時ご存命であつた彼の父上、元石橋首相にお送りしようかと何度も考えたが、新たな悲しみを加えてもどうかと思ひ直し手元に残存していたが、終戦の時に日記とともに焼いてしまつたのは痛恨のかぎりである。

三十年を経た今日、折にふれては中部太平洋上のあの狭い島々、椰子の葉蔭と紺碧の海、彼の笑顔を鮮烈に思いおこし、できればあの島にもう一度行ってみたいと思ふ。幻想かもしれないが、行けば浜辺で、石橋たちが笑いながら迎えてくれるような気がしてならないのである。

「五分前の青春」―第九期海軍短期現役主計科士官の記録―より転載

とりもつ縁

△その一▽

広島県 大上八重子

秋とは名のみで、日中毎日暑い日が続いています。会長様、奥様、御元氣でお越しの事と思います。

此の度マジユロからのお客様のお迎え、おもてなし等の事で大変お疲れになられた事と思います。お客様、一日で良いから日本へと思っておられた人ばかりでしょうから、会長様始め皆様的心からなる「おもてなし」に感謝しながら喜ばれた事と思います。

本当に御苦勞様でした。お疲れが出ない様お祈り致します。今日です。さて、先日大阪で開かれた読売新聞の戦争写真展の中で、「訪ね人コーナー」がありました。その中で、『私の夫は二月六日クエゼリン島で戦死しました。松宮（海軍兵曹長）です。誰か知って居られる方を』と書いてありました。早速大阪へ電話を差上げました。七〇歳になる方で一人で暮らしておられます。あまりの嬉しさに声もつまずき、只、有難うございます。有難うございますのみでした。

その日、手紙を書簡箋に六枚書き綴りました。松宮様のこの喜びも、私が三年前喜んだのと全く同じ心境です。

私が去年墓参出来た事、以前会長様から送って頂いたクエゼリンの碑の写真と同封し、又東京にマーシャル方面遺族会のある事、又心優しい会長様、皆様のおられる事、会費とか、色々書いて送りました。

多分、お手紙を差出していらっしやる事と思います。私事で長々と書きました。御判読下さいませ。かしこ

△その二▽

大阪市 松宮 花子

初めまして。書面にて失礼致しませ。松山市枝松町の岡本直三様より、戦争展訪ね人コーナーで見ましたとおっしゃいました。御親切にお手紙下さいました。くわしく、よく判るように書いておられましたのでクエゼリン島の事もよく判りました。色々御忙しい中をお世話様になります。又遺族会にも入会させて頂きたいと存じますのでよろしくお願い致します。

主人に召集令状がまいりましたのは佐世保鎮守府からで、始めはヤルト島に行き、次はクエゼリン島に変わったと通知がありました。

日本を離れる時は横須賀より行くけれど、見送りに来ずともよいと便りがあり、昭和十五年十二月中頃に応召しました。私が十六年一月十一日に男の子を出産致しました為、見送りが出来ませんでしたのでそれが今だに心残り

です。なにぶん年寄りの事にてお判りにくい文になりましたがお許し下さい。まだまだ暑い日が続きますが、お体大切になさいませ。

△その三▽

松宮 花子

御忙しき中をくわしく御通知下さいまして有難う存じます。現地の写真見せて頂きました。クエゼリンの御砂まで有難うございます。

永い間、クエゼリン島の事を心に掛けておりましたが、どうしたらよいやら雲をつかむようで私が生きている間にどうにかしてと思っておりましたら読売新聞（大丸店での）の戦争展の事を去年初めて知り。新聞に載せて頂きましたところ、広島、愛媛、奈良の各県、高松、堺、大阪、京都の各市の方々より一日中電話がかかって参りました。びっくり致しました。手紙も次々と下さいました。そして浮田様を教えてくださいました。

今度ほどありがたくて嬉しかった事は一生忘れません。仏壇の主人の写真がほえんで見えるようになりました。此の頃のように物価高の時代、お世話下さる方も大変だろうと思えます。どうぞよろしく御願致します。

京都の中村様より頂きました終戦時海軍主要部隊位置と云う大きな地図を、又松山市の岡本様より「一億人の

昭和史」と云う本を頂きましたのを、私の宝物として毎日眺めては涙が流れて来ます。他にはクエゼリンの事を知る物もありません。浮田様、御忙しき中を恐れ入りますがお気付きの品を御本でも写真でもお送り下さいませんでしょうか。第六通信隊全員の写真は是非頂けませんでしょうか。その他のどのような品でもお送り下さいませ喜んで頂きます。会費その他送金させて頂きます。

マジユロ起点の航空路ひらく

会長 浮田 信家

環礁ゲラ刷校正中の六月十六日山村さんからみだしのニュースが入った。飛行場の完成したウォッセ、マロエラップとブラウンに12人乗りの飛行機が就航することになった。運賃その他委細は不明だがブラウン島との間は二週毎の定期便がある。近くマーシャル諸島政府の資源開発大臣カサイ・ノート氏（山村 要氏三女の婿）が日本との漁業関係の打合せのため訪日の予定につきその時會って、飛行機の件、ブラウンの件、具体的に調査されたとのことであった。

お忙しい日程に違いないが是非お会いしてくわしくお聞きし、機会を見て皆さんにお伝えしたいと思えます。

マーシャル諸島の高潮水害に お見舞金をおくる

既にご存知の方も多いかと思いますが、昨年十一月と十二月にマーシャル諸島一帯が、大平洋の異常高潮に襲われ、さきの現地慰霊の際訪れたマジュロ島をはじめ多くの島にかなり大きな水害があった由にて、本会として、早速、浮田会長から、アマタ、カプア大統領と、昨年夏に来日した山村要さんに、お見舞状をお出しした処、山村さんから、次の様なお手紙を頂きましたので取敢えず原文のままお知らせいたします。

なお、日本政府からも見舞金をおくられたことを厚生省援護局から聞きましたが、本会としては、さきの二月六日、七日の直会旅行で、お見舞金の話が出て、旅行費の一部等一五万円(六〇〇・三六ドル)を、現地へ見舞金として三月二十六日銀行振込送金を致しました。

若し現地に見舞文でもお送りになりたい方は、本部経由でも結構ですが、住所は左記の通りです。

Mr. Kaname Yamamura
P. O. Box 456

Majuro Marshall Is.

T.T. of The Pacific Islands 96960

(山村様のお手紙 54 12・20付)

拝啓

昨日お手紙拝見しました。皆様には益々お元気で居られることと存じます。私達同胞一同もおかげさまで毎日仕事をしています。

この度の水害は十一月二十六日の正午にはじまりました。私が元の水上げ機の仕事所前を通った五分後にとつぜんおこった事でした。その事務所の北側三十尺の距離にあった家が突然おそって来た大なみにたつていたところから道の方にながされて行きました。その家の中には老夫婦ともう一人おじいさんと子供が二人おりました。さいわいにおじいさんがかかるいけがをしただけです。おじいさんが来るまで波が波が島に上がって来て、たてものをこわしたりながしたりしました。十一月二十六日、二十七、八日で一回目の水害がおわりました。この水害で政府立高校までやられました。

十二月二日三日四日におしよせて来た波は前のよりもっと大きかったのです。ことに十二月三日の夕方におそって来た波は今までに経験したことがない高い波でした。この二回の水害とも風がなくて無風状態でした。水害のあった日は上げ潮と引き潮の区別がありませんでした。もう一つ変わったことは、今までの大きい波は島のリーフに

つくまで大きく高く見えますが、今度の水害では波は見えず海上は普通と同じですがリーフに近づくとふくれ上がつて、二十尺から二十六、七尺までの高さになって島におし寄せて来るのです。その間島に上がるまでだんだん小さくなります。

さて、お尋ねになれます一同東京に行つた十四人と行けなかつた同胞一同の安否を知らせます。

タマキ君夫婦、ノーマイさんは水害のがれました。チーネの家は全部波に流されました。エミ子の家は水びたしになりましたが、カトリック教会のかげになっていたので家は流されませんでした。ナアション夫婦の家とまわりにあつた家は、ナアションの店を残してあとは全部流されました。水害でハナ子さんの家は波にかぶされましたがコンクリート建てなので助かりました。三郎君は家がめちやめちやになつた外無事でした。三郎の家は、一回の波で少々いたんでいました。一番ひど

くつた十二月三日の夕方、その朝島を見て廻つた時、三郎が家の修理をしていました。引越すよう言いましたが行かなかつたので夕方一番ひどかつた時家がめちやめちやになつた外、持ち物を相当流されました。でも無事でよかつたのです。私達の家も海水で家のまわりがひざまで海水が入りました。それで荷物をほとんど天井のうらに上げましたので何もありませんでした。

このたび東京に行つた十四人と残つていた人達は皆無事です。他事ながらご安心下さい。

今度の水害は今までにあつた水害とは大部変わりました。上げ潮と引き潮の区別が分らないと、波は普通の波の高さと変わりませんが、岩しように上ると、二十五、六尺の大波にぶくぶくと高くなります。それと、最初の三日間と、後の三日間は天気がよくて風が無い日でした。被害は古い飛行場の先東側からずうつと北方のリータ村までやられました。リータ村の小学校とその近くはどうもなかつたのですが、その外は全部やられました。家もこわれたり流されたりしました。

こんな水害を初めて見た人達は皆こわがつたのですが、多くは経験していますので島のほとんどの人々は落ち着いていました。でも島の人は、ローラ、マジュロ本島へ避難したのがたくさんいました。今家の無い人が何千人もおります。今、テント住いしています。三郎君もテント住いです。最後に日本政府からの援助を感謝します。浮田様始め御本会一同様の変らない御友情に皆感謝しています。今は、気がまだ落ち着いていませんので後日もう一度こちらの様子をお知らせします。

現地の便り

山村要様より 55・1・1受信
謹賀新年

昨年中は色々とお世話と御世話下さ
いまして誠に有難く御礼を申し上げます。
今年もよろしくお願いいたします。

一九八〇年元旦 山村 要
マーシャル方面遺族会御一同様

外に浮田宛

一、マジユロの新聞は週一回発行で
す。一部25セントです。

二、航空会社は現在のところありませ
ん。将来できるそうですが時期不明
きまり次第しらせませす。

三、今年もクエゼリン墓参団がマジユ
ロに立寄られる予定の由。島の日系
人たのしみにお待ちしています。

山村要様より 55・3・28受信

おなつかしいお手紙ありがとうございます
いました。こちらの日系達もおかげ様
で毎日元気です。今年日本観光団、今
のところはつきりしません。行けるよ
うでしたら皆の希望としては浮田様た
ちの御指導におすがりしたいと皆いっ
ております。いろいろご迷惑かけまし
たこと皆心からお詫びしています。昨
年のようなことのないよう心がけませ
す。から今後よろしくお願いいたします。

2月頃航空会社の話があったのです
がインチキな会社であったので返さ
れ、5月に来るといふ話もあるのです
が、決まりましたらおしらせします。
今マジユロでは高等裁判のときです
のでいそがしく、今日はこれで失礼し
ます。

山村要様より 55・4・8受信

3月28日のお手紙、3月31日に拝見
しました。昨年日本滞在中は大変お世
話になりましたのに、ろくにお礼もし
ない中に高潮のお見舞までいただき、
何とお礼を申したらよいかわかりま
せんが、どうか貴会の皆様に私共の御
礼の気持ちを充分にお伝え下さいますよ
うお願いいたします。

次に4月2日こちらの政府の資源開
発大臣のケーサイノートさんが日本政
府とマーシャル群島の漁業のことで日
本に参ります。会議は4月4日にはじ
まり9日まで行うことになっていま
す。このケーサイノートは私達日系の
会員です。彼の叔父は現在東京で歯医
者をしているそうですが、元ヤルフト
にいた保田昌宏様がよく知っていますそ
うです。彼は5月にマジユロに来る飛
行機のことならよく知っていますから
出来ましたらお聞き下さい。彼が飛行
機のことです。オーストラリアに行って交
渉して来ましたので何でもよく知って
います。他事ですがケーサイノートは
私の三女の夫ですから何でもよいです

から色々おき下さいます。前々からお知
らせしようと思いましたが予定が決ま
っていなかつたので今日までになりま
した。間にあうか知りませんがおし
せします。(浮田記、この手紙ですぐ
ケーサイノートさんの所在をしらべた
がすでに帰ったあとで会えなかつた)

山村要様より 55・5・28受信

浮田様にはお変わりなく、お元気で
お蔭様で皆元気です。

お尋ねのエニウエトク島の件ケーサ
イノートさんにおあいになつたらいろ
いろ聞かれると思います。彼は今度で
二度目です。

エニウエトク島は今の所白人がいな
いといつていますが、たしかなことは
まだはつきりわかつていません。この
次お知らせします。

同島には知り合がたくさんいます。
殊にむこうの酋長は私の友人です。から
後日連絡がとれるよう手続きします。

どうかしばらくお待ち下さい。
それから皆様の真心のこもったおみ
まい金五八七ドル六六セントは5月8
日確かに拝受致しました。誠にありが
とうございました。さる5月18日、日
系一同に集まってもらつて、皆に見せ
ました。この貴重なおくりものを無駄
に使わないよう、皆で話しあつていま
す。遺族の皆様によりしく御礼申し上
げて下さい。ではお体御大切に下さ

さい。

大里清様より 55・5・28受信

長い間ご無沙汰して本当にすみませ
ん。何度もお手紙をもらつたのですが
病気をしていました。昨年9月尿が出
なくなりクエゼリンの病院に入院受診
の結果症状進んでいたのでホルルの
病院に入院手術しました。朝7時に手
術、夜9時に終つて自分のルームに帰
りました。その後なつてクエゼリン
に帰りましたが、つづいて今年3月か
ら肺炎になり3月から5月7日まで入
院し、やっと退院して出勤しだしてか
ら一週間たつたところです。

この間ヴァンネッタ司令官は転任の
ため、米本土に帰られ、後任のリース
大佐も短期間で交代され、その後3月
7日に新司令官ウィッテリー大佐が着
任されたばかりです。まだお人柄はわ
かりませんが今までの司令官より厳し
い方ようです。

(浮田記・機密度の高いところすか
ら敵しいのが当然と思います。私が昭
和42年米船ではじめてクエゼリン棧橋
に着いたとき、連絡将校が船まで来て
陸上散歩をしたいかきかれました。上
つてみたかつたのは当然であつたが、
日本を出る前、外国人は上陸は許され
ない。私も前軍人であり規則で上陸で
きないのに船からは降りませんと断つ
たことが当時の司令官の耳に入り、そ
の後の私に対し信頼を深め格別の好意

を示されたと聞いた)

10日警察から私の家に電話がかかりボナベに今日本から19人来て、12日にクエゼリンにゆくといっているが、そのことをしっているかとの問い合せでありません。そして12日にこんどはこちらから警察に聞いたところクエゼリンにとどまれずイバイ島にやられたそうです。

(浮田記・本会の耳には入らないが、どこかの旅行社が本会の了解なくクエゼリン墓参の斡旋を企画したのではないかと。ウィッテリー司令官の処置ではないか。頼母しくも思った)

浮田様のお手紙によれば7月31日に墓参の方が来られるとか。司令官の方から前と同じようOKが出るよう祈っています。

徳原徳子様から 55・5・14受信

クエゼリンの司令官は二ヶ月前交替し Colonel P. H. Witteried という人になりました。主人徳原もまだ面識ないため墓参については、そちらから直接司令官に出して許可を求める以外ないだろうとのことでした。

マジユロの水害は相当大きなものだったようです。住民の90%は被害をうけ家を失ったことですが、死傷者が出なかったことは不幸中の幸いでした。水害のあと、ハワイの空軍基地からも百人位のコックさんがマジユロに出動して炊き出しなどをつづけ又多

くの建築資材や食糧、医薬品なども送られたということです。しかしクエゼリンには被害はありませんでした。

なお御存知と思いますがエニウエトク島は、先月正式に住民の手に戻され、島民達は島に帰って生活をつづけている様です。放射能の処置はすっかり終わったということです。

来年あたり桜見物に日本へ行って見たいと思っております。ふところの都合で実現するかどうかわかりませんがもし実現すればまた皆様とお目にかかれます。

ハワイはすっかり夏の暑さになり、先日日本の連休には日本からの観光客で町はあふれていました。皆様相変わらずお元気のことと存じます。よろしくお伝え下さい。

中田勇様より 55・5・19受信

皆さん御健康にお過ごしと思います。司令官が交替したので私達の方から願ひ出るのは無理と思います。従来あなたがなさった方法で直接司令官に願ひ出るのが一番よいと思います。

大里さんはながく入院していましたが先週退院し出勤して来ました。おたずねの墓参のことについては大里さんの方から連絡があることと思います。昨年の高潮被害は極く軽微でした。

寄付者芳名

(敬称略)
(四一五名)

本欄に掲載の会員各位は、年度会費御完納の上の御寄付であり、本会運営上寄与するところ多く役員一同いづも感謝申し上げます。一層節約を旨とし本務遂行に事欠かぬよう留意いたしますので今後共御協力いただき度御礼と共に御願ひ申し上げます。
(昭和54年11月1日から昭和55年5月31日までに入金の方)

篤志会員その他

三〇〇〇〇
一〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

塩野 宣徳殿
浦郷 久之殿
嘉村 栄殿
小賀阪四郎殿

七〇〇〇
五〇〇〇
〇〇〇〇〇

星川 武殿
上森 房次殿
井上 義夫殿
高田源次郎殿

三〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

須藤 圭一殿
土屋 太郎殿
十二 徳次殿
匿名殿

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

鈴木辰太郎殿
高野 庄平殿
長谷川 博殿
福田 呉子殿

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

松平 永芳殿
進藤 進殿
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

金子 きよ
白山光枝子
伊藤 フジ
北村弥三郎

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

長女 伊藤 フジ
父 北村弥三郎
妹 小山キミ子

岩手県

一〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

江藤 ハナ
塚原 ハナ
荒谷美佐男
本堂 テフ

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

下川与三郎
伝福 ちあ
蛭田 タケ
栗石 ハツ

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

安藤 常美
菅原 キイ
星川 クマ

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

加藤 源治
平形せいこ
松木 孝子
渡辺 雪子

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

熊谷サタヨ
小室舜司郎
相馬 ツギ
大宮 タツ

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

卵花要一郎
加藤 源治
平形せいこ
松木 孝子

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

関山富一郎
大宮 タツ
相馬 ツギ
小室舜司郎

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

〇〇〇〇
〇〇〇〇
〇〇〇〇〇

